

# 心豊かに表現する生徒の育成(1年次)

～造形的な視点を大切にしたい学習指導の在り方～

矢吹 怜美

Satomi YABUKI

## 概要

前次研究では、効果的に美的な見方や考え方を働かせ、主体的に美的な価値を見出す生徒の育成を目指した。具体的には、自身の追究過程を短・中期的に振り返らせ思考・判断を促す工夫と、長いスパンで自身の追究と成長を振り返らせ、題材間や一定スパンで学んだことなど自身の成長を振り返らせる工夫を試みた。その結果、自身の追究と成長を振り返らせることができ、自ら考えることへと向かっていく可能性を感じることができた。それを土台に、新研究では、造形的な視点を手掛かりに、生徒が日常生活や社会の中の美術の見方・考え方に気付き、それらを心豊かに表現していく方略について研究を進める。

キーワード: 自己調整的な学習, メタ認知, 造形的な視点, 知識のつながり

## 1. はじめに～研究の目的

新学習指導要領(2017年7月)では、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。また、生涯にわたって能動的に学び続ける生徒等が求められており、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組が求められている\*1。

このため「生きる力」の三つの柱に沿って、各教科等の目標や内容が整理がされるとともに、生涯に渡って能動的に学び続けることができるようするために、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。

美術科でも、今までの学習指導に加え、感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等について、更なる充実が求められている\*2。

これらを踏まえ、本校美術科では心豊かに表現する生徒の育成を目指し、造形的な視点を大切にしたい学習指導の研究を行っていく。

## 2. 生徒の実態

本校美術科では、前次研究において、主体的に美的な価値を見いだす生徒の育成を目指して、自身の追究過程を短・中期的に振り返らせ思考・判断を促す工夫と、長いスパンで自身の追究と成長を振り返らせ、題材間や一定スパンで学んだことなど自身の成長を振り返らせる工夫を試み、自身の追究と成長を振り返らせることができた。一方、以下については生徒の学習活動において課題が見られた。

- ・学んだことと関連付けて自ら考えること
- ・発想を広げたり、構想を練ったりすること

以上のことから、今までに身に付けた知識が他の題材でも生かせることに気付くことや、体験的な活動より得た気付きから発想を得たり広げたりして構想を豊かにしていくこと、それらを振り返りよりよい表現をするために知識のつながりを生かすことが本校生徒に必要であると考えている。

## 2. 1. 目指す生徒像

本校美術科では、生徒の実態を踏まえ、目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・今までの学びから知識のつながりに気付く生徒
- ・よりよい表現をするために知識のつながりを生かすことのできる生徒

森本信也は、試行錯誤の振り返りによる知識の積み重ねを経て、「事実・概念に関する知識」から「操作、あるいは手続きに関する知識」へと知識のネットワークが強化されると述べている。美術科の新学習指導要領でも、「美術科の学習は、様々な形や色彩などの造形と、想像や心、精神、感情などの心の働きとが、造形の要素を介して行き来しながら深められる」とされている<sup>\*3</sup>。表現活動や鑑賞活動に取り組む過程で必要になった技能や気付いたこと、得た知識を造形的な視点から振り返ることで、より深く理解したり、美術の働きなどがどのように日常生活を心豊かにしているか気付いたりできるようになり、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力を高めることができると考える。

ここでいう知識とは、造形的な視点を豊かにするために必要な知識のことで、[共通事項]「ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること」「イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること」のことである<sup>\*4</sup>。

また、知識のつながりに気付くことは、表現にむかう意欲を育む点でも重要だと考える。前述の森本氏は、「子どもは、内発的動機付けと外発的動機付けが交互に循環することで意欲が高まっていく」とも述べている。外発的動機づけとは体験することによって感じている意欲のことで、内発的動機づけとは体験を経て自身の中から出てくる意欲のことである<sup>\*5</sup>。

これは、美術科にも当てはまり、体験的な活動をすることで、外発的動機付けが起こり、ある中間地点において、または活動を終えて、振り返ることによって自分は何ができたか、どう感じたかを認識することによって内発的動機づけが起こると考える。特に、自身の主題を表現できたかどうか認識することは、活動意欲・動機にとっても重

要なものであり、ひいては態度の形成の土台として大切だと考える。

また、以上のことから、目指す生徒像と本校美術科の研究主題を結びつけるものとして、更には本校研究における「質の高い学びのための4つの視点」と共通するものとして、自己調整的な学習との親和性が高いと考える。

自己調整的な学習とは、学習者が『動機づけ』『学習方略』『メタ認知』の3要素において自分自身の学習過程に能動的に関与していく学習方法で、適切な支援を得ながら、自立した学習を行っていくものである<sup>\*6</sup>。美術でいうと、生徒のもっている主題が『動機づけ』（どう考えているか）、発想や構想の考え方が『学習方略』（どう取り組むか）、作品に取り組む過程が『メタ認知』（どうなっているか）にあてはまる。造形的な視点を通して、振り返ることは、自己調整的な学習、特にメタ認知においても重要である。以上のことから、自己調整的な学習を参考にしつつ、研究主題を次のように設定した。

## 3. 研究主題

心豊かに表現する生徒の育成(1年次)  
～造形的な視点を大切に学習指導の在り方～

本校美術科では、新学習指導要領で記されている、美術科で培った資質・能力、つまり生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力をどのような方向性で働かせていかに重点を置いて研究を進めていく。

特に「心豊かに表現する」という部分では、新学習指導要領で、「学校外の生活や将来の社会生活も見据え、生活や社会を造形的な視点で幅広く捉え、美術の表現や鑑賞に親しんだり、生活環境を美しく飾ったり構成したりするなどして、心潤う生活を創造しようとする態度を養うこと」と記されている<sup>\*7</sup>。

生徒の実態より、このような態度を養うための土台を育み豊かにしていくことが必要だと考える。この土台、つまり表現活動や鑑賞活動といった体験的な学習を通し、知識を発見したり、身に付けた知識のつながりに気付き別の場面で活用したりすること、それを造形的な見方・考え方で振り返ることを大切にしていこうと意欲が高ま

り、心潤う生活を創造しようとする態度が養われていくと考える。

ここでいう造形的な視点とは、造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点のことである\*8。この造形的な視点を手掛かりに、生徒が日常生活や社会の中の美術の見方・考え方に気付き、それらを心豊かに表現していくことを目指す。

#### 4. 研究の内容と方法

本校の1年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代に必要な力を踏まえた「質の高い学び」に向かうために、以下の「4つの視点」が重要であると捉えている。

- ・『意欲』から『意味』への転換
- ・『学び方』を学ぶ自己調整的な学習
- ・知識発見から知識構築のプロセスへ
- ・知識や最適解を他者と創るプロセス

この中で、本校美術科では、特に「『学び方』を学ぶ自己調整的な学習」、「知識発見から知識構築のプロセスへ」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「2. 2.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。

##### 4. 1. 造形的な視点を増やすために認識を高める工夫

前述の「知識発見から知識構築のプロセスへ」に向かうための手立ての一つとして、題材を造形的な視点から知識のつながりを視覚化し、〔共通事項〕の認識を高める工夫を行う。

今まで身に付けた知識を生かし、自ら考えるためには、知識が自力で取り出し可能であることが前提条件としてあり、まず身に付けた知識の存在を認識させることが必要である。その前提条件をクリアして初めて前の題材と今の題材の共通点に気付き、知識のつながりを生かすことができるようになると思う。その知識のつながりに気付かせるために〔共通事項〕や造形的な視点に着目させる。

例えば、「色」や「形」などの視点で考えると以下のような知識のつながりがある。

1年生の題材「美しい構成と装飾」では、画面構成の1つの方法としてシンメトリーやアクセント、リピテーションを生かしたり色のイメージを生かしながら表現の活動を行っている。2年生の題材「光で表現する」では、1年生で学習したことを生かしながら、色彩や画面構成から伝わるイメージを生かし表現活動を行っている。3年生の題材「日本の美意識」では、それらを踏まえて、材料の性質も考えながら黒・虹色・金の3色をどう画面構成すれば効果的に主題を表現することができるか、知識のつながりを生かしながら、いかに自分の主題に収束させていくか、という題材構成になっている。

このように、自分の主題をよりよく表すための考えるきっかけ・視点となるようなものを生徒自身が気付くことができるように提示の仕方を工夫する。そうすることによって、視点から考えることで発想や構想が豊かになったり、別の題材との知識のつながりが見えやすくなると考える。

##### 4. 2. 発想・構想を豊かにするために振り返る工夫

前述の「『学び方』を学ぶ自己調整的な学習」に向かうための手立てとして、前述の4.1の活動を自身のワークシートに残す等、活動における記録の工夫を行い、自分の主題に合ったものを選ぶために選択肢を増やす発想の幅を広げる工夫を試みる。それぞれの事項の学習を深めるには、その事項においてどのような考え方で思考し、発想や構想をしていくのかということを生徒自身が理解し自覚できるようにすることが大切だからである。「A表現」(1)では、Aの事項は自己の表したいことを重視して発想や構想をするのに対して、Iの事項は目的や機能などを踏まえて発想や構想をするなど、発想や構想の考え方には違いがあるからである。

以上から、ワークシート等でワークシートの問いに視点から考える部分を(何と何を比べる?どの視点で?等)意識しやすいように設問する等、次回につながる・振り返ることを意識したデータを蓄積させる工夫を行う。活動によって得た知識の記録を残すことで、知識が生徒の中で認識・可視化され、その知識を生徒が自覚的に使うことの一助となると考える。そして、構想を練る(主題に

近づくことを考える)時には、考えるヒント(視点から考える)を自身で振り返ることによって、「どうしてこれか、どうしてこれではないか」等の理由をもって自分の主題に合ったものを選びやすくできると考える。また、前述の森本の説にあるように、自身で体験したり発見したりした知識は、その活動へ取り組む動機・意欲、ひいては態度に結び付く大切なものであるため、それを記録して可視化したり振り返ったりすることは、重要なことであると考えられる。そして、その経験を積み重ねることによって、発想や構想の引き出しが増え、自身の表したいことに近づきやすくなったり、交流の際、知識が共通言語として働くことによって意図が伝わりやすくなり、より構想や考えを深めやすくなると考えられる。

## 5. 実践と考察

### 「日本の美意識(第3学年)」

#### 5.1. 単元の構想

実践を行うにあたり、対象である第3学年の生徒には、以下のような実態があった。

項目	割合(%)
美術の学習が好きである	73%
美術科の学習は日常生活と関連がある	54%
今までの学習を別の題材でも生かしている	69%

以上の結果から、生徒は美術の学習に興味がある生徒でも、日常生活との関連や学んだことと関連付けていくことに課題があることが明らかとなった。また、今までの学習で学んだことが、知識としてあまり活用できていないことが明らかとなった。

本題材では、伝統的な文様や模様を調べ、それらを「螺鈿(らでん)」や「蒔絵(まきえ)」の技法を用いて表現する活動を扱った。

伝統的な文様や模様は、古の時代から日本に住む私たちの季節やその変化への眼差し、自然観などが反映している。これらを表現のモチーフとして扱う中で、自分なりの世界観を表現できると考えたためである。

#### 【工夫1 造形的な視点を増やすために認識を高める工夫】

本題材では、「色」「形」「素材・材料」の視点から、知識のつながりに気づくことができるよう提示の仕方や声かけを工夫した。

例えば提示の仕方では、既習事項の色彩や画面構成から伝わるイメージを前学年の資料や作品をスライド等で振り返り、どうすれば材料の性質も考えながら効果的に主題を表現することができるか、両方の技法を試しながら考えていけるようにした。また、伝統的な模様・文様を実際に自分の作品に生かしていくことによって、自分なりの見通しをもつことが苦手な生徒にも取り組みやすくと考えた。また、題材の大まかな流れも1年時の画面構成の仕方の振り返り(リピテーション、シンメトリー、ダイナミック等)を発想・構想のタイミングで入れたり、交流時には作品の全体イメージを感じ取るように設問を変え、1・2年時から継続して行ってきた鑑賞時の画面から感じる物語性と関連づけられるよう机間指導の際に声かけを行った。

「素材・材料」の視点からは、構想を考えながら素材に直に触り、実際に試し活動を行うことで、生徒の中で発想の具現化、広がり、収束といった一連の流れが行われると考えた。この素材を「知る」体験が、自身の発想や創造的な技能につながっていくために必要だと考え、発想・構想に先駆けて・あるいは平行して全ての題材で試し活動の時間を設定した。

発想の段階では、前年度の2つの発想法から生徒自身がやりやすい方法を選択することに加え、発想の苦手な生徒には、「思いついたイメージを絵に書いたら？」と自分の中のイメージを一つずつ拾い出すよう声かけをし、発想のはじめの一步の記録を振り返りやすくした。

#### 【工夫2 発想・構想を豊かにするために振り返る工夫】

前述の『「学び方」を学ぶ自己調整的な学習』に向かうための手立てとして、本題材でも、活動内容の記録の工夫を行った。

また、発想・構想のための時数を多くとることで、発想法を両方とも試したり素材を試しながら考えたりする余裕をもった。そして、それらをワークシートに記録することで、実際に構想をまとめる際に参考しやすいようにした。

また、構想をもとに交流を行った際には、造形的な視点から見てどう表現されているかお互いが共通言語をもって考えやすいように設問・例示の工夫を行った。

なお、本題材の大まかな流れは以下の通りである。

時	学習内容	評価 規準
1	○日本の美意識に気付かせる活動	態
2	○表現主題への発想を広げる活動	思 態
3	○表現主題を充満させる活動	知
4～	○表現主題を充満させる活動	知 思
6	○試しの活動	態
7～	○交流	知 思
12	○表現を追究させる活動	態

## 5. 2. 授業の実際

コロナ禍で変更した部分はあったが、取捨選択をその都度行い大枠で実施することができた。交流においては、3密を避けることを前提に、KJ法などの方法で、自分が伝えたい主題が伝わっているか確かめた。以下は、生徒のワークシートより抜粋したものである。

### 【生徒 A のワークシート】

読み取った主題:「春のよろこび」

・ちょうが何匹もいて喜んでる感があった。下には春の花たちがあったから花びらを増やしてまいおちてる感を出したらより良いと思った。

### 【生徒 B のワークシート】

・とりあえず春と桜の印象をつたえられているので、桜の配置は変えないでおこうと思う。また、アドバイスの通り右角の飛び出は繰り返すことで丸く入れられるようにしようと思った。兎に関しては、冬を連想してしまうのかと反省もしたが、桜を入れることによって春らしさを出したいし、「冬」というテーマも入れてみても良いかな。

・桜吹雪は他の人のも見て蒔絵を少し入れてみたら良いかもしれないと思った。

### 【生徒 C のワークシート】

5回螺鈿を試してみても貝がとても割れやすいものであり、加工がすごく難しいものであるということが知ることができた。また細かいものを切るのは大変だが出来たときは達成感があり綺麗だった。次使うときは何らかの目立たせたいものや細かいものを使用すればおもしろい表現ができるのではないかと思った。

## 5. 3. 1 工夫1についての結果と考察(3年)

交流後、修正した構想シート内の造形的な視点について1クラス分を抽出した結果が下記である。

色・素材	配置
63%・75%	96%

結果から、「色」と「素材」が密接な関わりをもっていることを理解している記述が多く見られた。

「色」では、前学年で行った資料や作品、教師側で作成した失敗例や参考例を見せ、本題材でも共通する部分は無いか考えさせながら制作を進めたことにより、知識のつながりをいかす場面がみられた。また、「素材」では、両方を試してみることによって、「こういう表現を試してみたい」「この方法なら自分にもできるかもしれない」という自分なりの見通しをもち、選択肢を増やすことにつながった(生徒 C のワークシートより)。

「形」では、例えば交流場面において、画面構成をお互いに読み解くことで、より主題を伝えるにはどうすればよいのか、という意識を高めることができた(生徒 A のワークシートより)。その際、意見を受け止めるが、主題をぶれさせるのではなく、どうすればより主題が伝わるのか思考する姿がみられた(生徒 B ワークシートより)。

構想の段階では、可視化することによって、生徒自身があやふやに思っていた部分に気付き、どうすれば主題がより伝わりやすくなるか考えるきっかけになっていた。

制作の段階では、試しから制作まで連続して技法ごとのメモを行うことで、学びが蓄積され、「次はこうしてみよう」となるまでのスピードの加速がみられた部分もあったが、形式についてはより書きやすいものに再考したい。

### 【色と素材部分の記述についての抜粋】

- ・雲の部分の金(蒔絵)をうすく、ムラを作ることで雲のモヤモヤ感を表した。特に金を多くすることで月だと一目でわかるようにする。
- ・螺鈿で→海の近くをとんでいて、月の光が反射して色々な色が反射していることを表現。

### 【配置部分の記述についての抜粋】

- ・蒔絵と螺鈿を交互にして重なっている様子を表現する。・星や桜が複数でいるのに対し、龍を一人でとばせることで寂しさを表現した。

### 5. 3. 2-1 工夫2についての結果と考察(1年)

1年「美しい構成と装飾」では、食卓が楽しくなるような箸袋をテーマとし、主題をもとに配置やポスターカラーの特性を生かして制作を行った。構想での交流では、  
①自分の構想を「配置」「色」「形」という視点で振り返る  
②他者が同じ視点で感想・意見を述べる③感想・意見を受け、どのように還元するか決める、という流れで行った。その際、ワークシートの設問を視点ごとに整理し、自分の構想へと還元しやすいようにした。

③について1クラス分を抽出した結果が以下である。

配置を変更	色を変更	形を変更
28.5%	65.8%	17.1%

配置の変更では、箸袋の性質上、半分に折られるため自分のイメージと異なることに気づき、裏と表をつながるように変更もしくは裏と表で柄を変更するが左右対称になるような配置に変更が多かった。

色の変更では、主題をより目立たせるために、背景の色を変更したり指定したりしたものが多かった。

形を変更では、主題をより伝わりやすくするために、形に動きをつけたり道筋をつけたりと、主題に付けたしをする変更が多かった。

自信やモチベーションの高まりを感じた記述は51%あった。

### 5. 3. 2-2 工夫2についての結果と考察(2年)

2年「座ることから考える」では、「あったらいいな こんな椅子」をテーマとし、解決したい課題から主題を見出し、他者へわかりやすく伝えるにはどうすればよいか、画面構成や前年度使用したポスターカラーの特性を生かして制作を行った。

前半の課題解決の交流では、①自分の構想を「色」「形」「素材」「目的」という視点で振り返る②作品を4つの視点を踏まえて鑑賞してみる③作品から発想してみる④活動を振り返り、どのように還元するか決める、という流れで行った。その際、自分の構想～振り返りやすいようにした。

その流れのうち、②③④について1クラス分の記述部分を抽出した結果が以下である。

	色	形	素材	目的
②着目部分	69%	78%	57%	90%

③発想部分	24%	66%	48%	45%
④還元部分	21%	42%	21%	72%

②の着目部分では、問題解決に直結する「目的」に関する記述が一番多く、次いで前題材でも扱っている「形」「色」、そして問題解決を支える「素材」の記述が多かった。

③の作品から発想してみる部分では、「目的」は問題解決を別の方法で試みる発想が多く、「色」「形」「素材」ではより良い解決方法を考えている発想が多かった。

④の還元部分では、自身の問題に対し様々な解決方法に気づき、解決に向けて付け足したり変更したりしていることがわかった。以下はその抜粋である。

- ・色だけでなく、形や機能で安心感を与える
- ・色を使っている人で、銀色を使っている人がいたが、少し冷たいイメージを持ったので、自分の作品は安心で暖かいがテーマなので暖色を中心に使いたい。
- ・体をフィットさせるのは針金でもできるというのにはっとした。

## 6. 今年次研究の成果と課題

本校美術科では、今次研究の副題を「造形的な視点を大切に学習指導の在り方」とし、造形的な視点を手掛かりに、生徒が日常生活や社会の中の美術の見方・考え方に気づき、それらを心豊かに表現していく方略について探っていくこととした。

そうした考え方のもと、本校研究の4つの視点のうち、以下の2つに焦点を当てて研究を進めてきた。

- ①『学び方』を学ぶ自己調整的な学習
- ②知識発見から知識構築のプロセスへ

このうち、1年次では特に②に注目し、どのような方略をとれば「知識発見から知識構築のプロセスへ」とつながっていくのか試行錯誤してきた。その中で、全ての題材ではないが、造形的な視点でつながる第1学年から第3学年へのつながり、その前の小学部から中学部へのつながりを各題材間で関連させられるように改善を重ねているところである。また、造形的な視点から考えることを促し続けていると、他教科の学習でも造形的な視点から考えている場面に出くわすことが増えてきている。

## 6. 2. 研究の課題と今後の展望

以上の成果があった1年次研究であったが、その一方で課題もみられた。例えば、交流場面の設定方法についてである。交流場面は他の視点等を取り入れる大切な機会となっているが、行うタイミング、設問については、より造形的な視点から入りやすいような事前の展開や、ワークシートの設問の精査をしていきたい。また、工夫2の振り返り方についても、生徒が知識のつながりをより活かせるような振り返り、体験が経験になるように改善していきたい。

以上のように、生徒が身に付ける知識・技能におけるつながりと学び方における他者とのつながりについて、今後の研究を進めていくことが必要であると考えます。

(7)R.リチャート, M.チャーチ, K.モリソン「子どもの思考が見える21のルーチン」北大路書房, 2015

---

#### 注釈

- \*1 新学習指導要領美術編 p.1
- \*2 新学習指導要領美術編 p.6
- \*3 森本信也「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科授業の条件」p.54
- \*4 新学習指導要領美術編 p.7, 29-30
- \*5 森本信也「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科授業の条件」p.89
- \*6 伊藤 崇達(たかみち), 「BERD 13号「自ら学ぶ力」を育てる方略-自己調整学習の観点から-」p.14
- \*7 新学習指導要領美術編 p.19
- \*8 新学習指導要領美術編 p.10

#### 参考文献

- (1)森本信也「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科授業の条件」東洋館出版社,1993
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校,「研究紀要(67)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校,「研究紀要(66)」
- (4)中学校学習指導要領(平成29年告示)解説美術編, 文部科学省, 2017
- (5)伊藤 崇達(たかみち), 「BERD 13号「自ら学ぶ力」を育てる方略-自己調整学習の観点から-」Benesse, 2008
- (6)中山芳一「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」東京書籍, 2018